



Title	藤村文学における父子関係の一断面 : 「捨子」意識をめぐって
Author(s)	任, 苔均
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1997, 31, p. 47-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47922
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

藤村文学における父子関係の一断面

—「捨子」意識をめぐって—

はじめに

任 苔 均

47

島崎藤村文学において父と子の相克という主題は、『落梅集』の「告别」を始めとして『夜明け前』に至る多くの作品に受け継がれている。ところが藤村文学における父と子の問題は、このような相克の様相と共に、『新生』等の作品に見られる「神なる父」への回帰という、一種矛盾した性格を呈しているのも事実である。周知のように、父への回帰の動機は、「新生」事件以後、父の血の凝視を通して父の系譜を自覚した作者の自己認識⁽¹⁾にあるが、この相克と回帰の心理の深層には、より複雑なものが潜んでいるのではなからうかと思われる。本稿ではその疑問を解く鍵の一つとして、藤村の内面にある「捨子」意識を取り上げたいと思う。この点に関しては、関良一が「藤村文学の原点」として指摘した⁽²⁾ことがあるが、それ以降この仮説はそれ程発展されなのまま今日に至っている。そこで本稿では、この「捨子」意識について探り、さらにそれを乗り越えていく過程を突き詰めることによって、藤村文学

における父子関係を説き明かす一端としたい。

一

明治二五年八月、『女学生』夏期号外に無名氏の署名で発表された掌編「故人」は、藤村文学の深層に流れている。「捨子」意識の片鱗を窺わせる処女作ともいうべき作品である。エッセイ「故人」は、「風雅に志して天地の風情を慕ひしよりこのかた、故人を尋ね見んと願ひを立」てた主人公（藤村）が、旅先の鎌倉で、「この八月の七日その夕暮の刻までに故人に遇はんといへる」うつつの夢をたよりとして、同日同時刻「つゞれに包みたる捨子」を見つけたという筋である。ここでいう「故人」とは、藤村が古典の中で最も深く追求した芭蕉を指す。主人公が捨子に出会う場面で、藤村は芭蕉の『野ざらし紀行』の中の句「猿を聞人捨子に秋の風いかに」⁽³⁾を挙げながら、「かの故人を尋ねて破笠敵衣の老翁を見しとは聞けど、いかなれば予は今故人を尋ねてかゝる汝を見るらむ」とその意外な邂逅への感想を述べ、視点を悲しい運命に処せられた捨子へ移していく。このエッセイは次の文によって結ばれている。

この世の貧の涙を呑みて、父母は汝を捨てたるか。父母は汝を恋しと泣くか。恋しとこそは知らずして猶恋しきと泣くなるか。あはれよ天地の間に生れ来て汝のごとき命運の拙きはいくばくぞ。左れど天地の間に泣かむものは汝のみかはと、いひてしばしそこに佇立しが、予は今故人を尋ね得たりと捨子を抱きて明月をのぞむ程に、鐘は村雲のかなたに落ちぬ。

彼は、ここで「捨子」を通して「故人」に出会うのであるが、この文によるとエッセイ「故人」には、「捨子」意識という、藤村文学における父子関係の疑問を解く一つの端緒が潜んでいるのが分かる。作者は、自分の子を「貧の涙を吞みて」遺棄せざるを得ない父母の心を酌み、さらに「あはれよ天地の間に生れ来て汝のごとき命運の拙きはいくばくぞ」と捨子の命運を哀れみ、遂には「左れど天地の間に泣かむものは汝のみかは」と捨子への激しい共感を示して、捨子に「感情移入」しているのである。藤村が最初の芭蕉論「故人」に捨子を登場させる所以は、明治十九年、一五歳で亡くした「故人」父正樹への追想にあるといえる。現実の世界で既に父は「故人」になってしまい、藤村は父に見捨てられた捨子の運命に直面しているのである。換言すれば、エッセイ「故人」は、「故人」芭蕉との邂逅という表面的な執筆動機と共に、偶然に見つけた捨子（実際藤村が捨子に出会ったことの真偽を解明できる証拠は見つかっていないが）を媒介にして、その捨子に映された自分の運命に遭遇し、同じく「故人」である自分の父に巡り会いたいという願望が強く働いたとも憶測できる。

二

エッセイ「故人」は、明治二五年八月、戸川秋骨、湯谷紫苑と共に、一夏を鎌倉扇ヶ谷正宗跡に過ごしていた頃書いた文章であるが、『桜の実の熟する時』（大正八年）には当時の藤村の心境若しくは「秘密」を窺い知られる件が記されている。一章に「不思議な変化が捨吉の内部うちに起つて来た。その年の暑中休暇を捨吉は主に鎌倉の方で暮したが、未だ皆で経験したことも無いほどの寂しい思をした」とあり、岡見の妹に出会って「言ひあらはし難い」自分の心持を抑えるためにこの文章を書いた云々、と言っている。しかも牛込の下宿の方へ帰ってきてから、長い

こと最初の一節しか覚えられなかったオフェリアの歌の全部を、捨吉は一息に覚えてしまったのである。それは宗教と恋愛を二元対立のものに捉えていた青年藤村の苦悩の姿に他ならなかった。次の文は捨吉の基督像が窺われる箇所である。

捨吉が幼い心の底にある神とは、多くの牧師や伝道者によつて説かるゝ父と子と精霊の三位を一体としたやうなものでは無かつた。(中略)有体ありてに言へば、エホバの神とはあの三十代で十字架にかゝつたといふ基督よりもつと老年としよりで、年の頃およそ五十ぐらゐで、親しい先生のやうでもあれば可畏こはいお父さんのやうでもある肉体を具へた神であつた。(中略)斯のエホバの神が長いこと捨吉の心の底に住んで居たと聞いたたら、笑ふ人もあるだらうか。実際、他界あのよのことにかけては、捨吉は少年時代からの先入主となつた単純な物の考へ方に支配されて居て、まるで子供のやうにその日まで暮して来たのであつた。(一一)

右の文によると、捨吉の基督像には父のイメージが重なつていゝといふことが分かる。言い換えれば、この文は幼くして死に別れたため満たされなかつた父の愛を、空想上の理想の父なる神に向けさせ、符合させることによつて満たそうとした作者自身の精神の痕跡に受け取ることもできる。

捨吉は自分の内部の愛欲との闘いに際して、この神に「主よ、こゝにあなたの小さな僕しもべが居ります」と祈ろうとしても、妙に祈れなかつた。その代わりに捨吉は勝子の名を呼ぶ。彼は「自分の内部に眼をさましたやうな怪しい情熱が何処へ自分を連れて行くのか」と「言ひあらはし難い恐怖」さえ感じたのである。この「怪しい情熱」即ち愛欲とは、『若菜集』(明治三〇年)の「おくめ」の中の「こひには親も捨てはてゝやむよしもなき胸の火や」と

いう句にも現れているように、親と、具体的には父と両立できないという性格を呈しているものである。藤村の作品の世界には父親にだけ執着し、母親については殆ど触れていないという一つの傾向が見られるが、その原因については、母親の不倫によるものとする説がある。そしてこの母親の不義は藤村文学の中で女性への不信に繋がる要因となつていたのである。「父なる神」の前に愛欲(母の不義を背景にした)は罪であり、その罪を犯した場合、子である藤村は見捨てられざるを得なくなる。つまり藤村は、「神なる父」と「女性(母)」とは両立できないものという考え方をもつていたのである。とすると、藤村にとつて「捨子」意識とは、性の衝動に動揺されながらも、愛欲によつて父に見捨てられるかも知れないという不安がもたらした幻想であるとも解せられる。母親への失望がもたらした父親への服従の誓い、実はそこには父にさえ見捨てられるかも知れないという、人知れぬ不安が潜在意識として存在していたのであり、自我確立の過程において葛藤の種となつていたのである。

このような「捨子」意識は、処女作「うたゝね」(明治三〇年)の中で、日清戦争に際して志願兵として出征した主人公小一が、脱走の末、父姉川中佐の手にかかつて銃殺されるという悲惨な運命からも見出される。この小一の敵前逃亡の行為を父への叛逆の象徴として捉えらるれば、小一はその罪によつて父に罰せられ、父に見捨てられることになつたといえよう。しかも中佐が家の財産を私しようとして小一を殺したと邪推した妻お国は、中佐を毒殺し、自分も死ぬが、このように処女作に父と母の反目を描出している点は興味深い。また『破戒』の中で「たへいかなる目を見ようと、いかなる人に邂逅はうと決して其とは自白けるな、一旦の憤怒悲哀に是戒を忘れたら、其時こそ社会から捨てられたもの思へ」(二ノ三)という父の戒めがそれ程丑松を苦しめた理由も、父に捨てられるかも知れないという不安があつたからである。即ち「社会から捨てられたもの思へ」という父の言葉は、丑松

にとつて「父から捨てられたものと思へ」という声に響いたに相違ない。苦悩の末、遂に丑松は父の戒めを破り、素性を告白してしまうが、それによつてお志保との愛を成就するという筋には、「神なる父」と「女性(母)」との間で煩悶する作者藤村のジレンマが窺われる。

三

さて、そこで私は藤村の「捨子」意識を説明する概念として「エディプス・コンプレックス」について触れておきたい。周知のように、エディプス・コンプレックスは、もともとテーベの王ライオスがポイボス・アポロンの神託による予言を恐れ、妃イオカステとの間に生まれた一子を家僕の一人に手渡し、山間深く捨て去るという「子殺し」或いは「子捨て」の物語を背景とするソポクレスのオイディプス王の悲劇から名付けられたものである。つまり、捨子であるオイディプスが父ライオスを殺すというオイディプス王の物語は、捨子意識を持つ藤村が作品中の象徴的な親殺し・子殺しを通して親子ともに完全な個となるという、自我の確立に至る図式からも見出されるのである。因みに、「エディプス・コンプレックス」の側面である母親との交わりに見られる禁制の性格は、『ハムレット』にも共通しているところであるが、著作初期、この作品の大きな影響を受けたと思われる藤村の精神の深層には、性の本能が「抑圧」され続けていたと推測できる。まさに父への服従と反逆という問題に悩み、母を巡った性的関係にまずくオイディプス王やハムレットの運命は、藤村が抱えていた問題でもあったのであり、彼らの苦悩の秘密を共有していた藤村は、それを作品の世界に一種の記号として用いたのではなからうか。著作初期に見られる父子相克の底辺には、このような「エディプス・コンプレックス」的性格を呈する「捨子」意識が存在していた

ともいえよう。

島崎春樹（藤村）は明治五年、島崎正樹と縫子の四男三女の末子として生まれる（が、次姉継・三姉楊はすでに早世していた）。父正樹の数え年四二歳（天保二年生まれ）のことである。周知のように、日本には一時的に子供を捨てる儀礼的な捨子の習俗がある。この儀礼的な捨子とは、親の厄年に生まれた子であったり、生児が次々に死亡するようなとき、子供の将来を案じて、一旦捨てる形をとるものであるが、藤村の生まれた当時、父正樹がちょうど厄年であったことや、次姉と三姉が早世していたことなどから、藤村は「捨子」の運命をもって生まれたといえよう。藤村はそれを直視していた筈である。この儀礼的な捨子に捨吉、捨松などと命名することが多かつたこと（⁶）より、後に藤村は『春』『桜の実の熟する時』『新生』の主人公に捨吉という名を与え、『破戒』の主人公に丑松の「松」という字をつけるようになったのではなからうか。勿論このような儀礼的な捨子と「故人」に登場するような現実の捨子とはまったく異なるものである。しかし捨子の運命をもって生まれたという自己認識は、彼の脳裏を去らなかつたものと思われる。次の文は父正樹をモデルとした『夜明け前』の半蔵に関する記述である。

夫の噂だ。お民は片肘を枕に、和助に乳房を咬へさせ、子供がさし入れる懐の中の小さな手をいぢりながら、隣室から泄れて来る話声に耳を澄ました。（中略）初めて一緒に江戸への旅をして横須賀在の公郷村に遠い先祖の遺族を訪ねた青年の日から、今はすでに四十二歳の厄年を迎へるまでの半蔵を見て来た寿平次には、すこしもあの人が変わつてゐないといふ話も出る。（中略）

「痛。」

思はずお民は添寝をしてゐる子供の鼻をつまんだ。子供が乳房を噛んだのだ。お民は半ば身を起こすやうにした。彼女はそつと子供の側を離れ、おばあさんやお里のゐる方へ一緒になりに行かうとしたが、その度に和助が無心な口唇くちびるを動かして、容易に母親から離れようとしなかつた。(『夜明け前』第二部七ノ四)

右の文はお民が和助(藤村をモデルにする)に乳房を咬へさせながら、夫の半蔵の噂に耳を澄ます場面である。直接的な表現ではないものの、四二歳という厄年を迎えた半蔵の運命と和助の誕生が巧みに結ばれている。まさに生涯藤村の心の奥底に秘められていた「捨子」意識は、この文からも窺われるのであるが、父の狂気の故、父から離れていた長い断絶の期間や、幼くして父を亡くすことなどによって形成されたと思われる精神的傷痕は、無意識中に彼の「捨子」意識を深める要因となつたのである。そこで藤村は、この「捨子」意識の払拭のために、『家』『桜の實の熟する時』『新生』『夜明け前』等の作品を通して父探しの道歩んだといえよう。しかもこの文は、『夜明け前』に現れている和助に関する数少ない記述の一つであるが、ここに他の作品には身を隠しているような母お民(縫子)の描写が重なり合つていふところ注目にしたい。夫半蔵の身辺が気掛かりになつていふお民の懐に、和助が抱かれていふのであるが、乳房を噛んで母の関心を自分に向けさせ、「容易に母親から離れようとしな」い彼の姿は「エディプス・コンプレックス」の現れとも解せられよう。

四

藤村の意識の世界を追跡していくと、「捨子」意識とは対照的に、所謂「選民」意識というものが浮かび上がる。

『春』の中で長火鉢に鑿している岸本の手を見た民助は、「不恰好で、指先が短くて、青筋が太く刻んだやうに頰れたところは、どう見ても亡くなつた父の手にソツクリであつた」と感じる。また『家』の中でもお種は、夫達雄に「三吉がそこへ来て坐つた様子は、どうしても父親さんですよ……手付なぞは兄弟中で彼が一番克く似てますよ」という。しかも、『桜の実の熟する時』の捨吉も「捨吉ばかりは俺の子だ。彼には俺の学問を継がせたい」とお父さんが生きて居る中によく姉に話したといふことを思い出すのである。確かに藤村は正樹に特別な愛を受けていたやうである。二女と三女を次々に亡くし、厄年の年に得た末子への愛情は、藤村の名を自分の名に由来する春樹と名付けたことからもよく分かる。とはいつても「一番」「捨吉ばかり」という言葉が彼の作品に多用されている点は、藤村が異常なほど父の愛に執着していたことの証明にもなり得る。またこれは藤村自身の「捨子」意識への反動によつて生まれたものといつていい。

このやうに封建的家父長制度の秩序の中で、末子の藤村には所謂「選民」意識の発想が芽生えていたのであるが、その基盤となるものがキリスト教の旧約聖書の人間像に見られる。兄エサウから長子権を手放させ、また眼のかすんだ父をだまして、長子エサウに与えられるはずの祝福を奪つてしまうヤコブや、父の年寄り子で偏愛され、兄弟たちに妬まれ、奴隸として売られるが、後にエジプトの高官となり、飢饉のとき父と兄弟たちを引き取るヨセフのやうに、旧約聖書の中には、長子よりは末子が神や父の愛と祝福を受ける例が数多く記されているのである。藤村は、このような聖書の中の主人公に同感し、かつ、彼らに自分の姿を見つけたのではなからうか。

明治二六年の教会退籍の時でも、「聖書と普門品二十五とを箴中に残して須磨の故跡を訪づれ」とあるやうに、藤村は聖書を捨てなかつた。信仰は捨てても、聖書はいつまでも彼の心の伴侶であつたのである。特に旧約聖書は、

詩作時代の彼の文学に著しい影を落としているのである。まさに「捨吉ばかりは俺の子だ」という一種の「選民」意識をもとに、他の兄弟の家の経済も背負い続ける長子的風格の『家』の三吉の姿の中には、兄から長子権を奪って父の祝福を受けるヤコブや、苦境に立っている兄弟たちを引き取るヨセフの姿が重なっているのである。

このように藤村は、実は自分は父に愛されていたのであり、自分こそ長子的存在であると自己暗示をかけていくようになったのであるが、その背後には、『家』の中で「瘤の起つた時」お末という女中に手を出そうとしたという父の愛欲の物語を聞かされ、父の新しい一面を見出した三吉の血の繋がりの発見或いは父の系譜の自覚というモチーフが潜んでいるのである。この道程から我々は、父に出会い、自分の内部に潜む「捨子」意識を払拭し、それによって自己救済に至る藤村の精神史の変貌を読み取れるのである。その道程は、『家』の中で三吉と名を変えた捨吉が、『桜の実の熟する時』の中で一旦幸吉と名付けられるもの⁽⁹⁾、後で捨吉の名を取り戻し、『新生』の中で引き続いて捨吉の名で登場することからも察せられる。フランスの旅の中で父の実体に触れることによって、「捨子」意識というコンプレックスを逃れ、自己救済の道を見つけた藤村は、客観的な立場から堂々と捨吉の名をもって執筆に臨んだのであろう。

五

『夜明け前』の最終章最終節が「万事終つた」という一文で書き出され、半蔵の埋葬の場面に結ばれていることが象徴しているように、藤村は今まで自我確立の道を妨げてきた「捨子」意識というコンプレックスも父と一緒に葬り、一人の成長した人間として敢然と立ち上がることができるようになる。つまり、藤村は『夜明け前』を通し

て父との関係に煩悶していた子の時代への決別を告げた訳である。歴史の中に父の人生を描出することによって、藤村は少年期以来抱えつづけてきた「捨子」意識というコンプレックスを克服し、客観的な視角を獲得した。

『夜明け前』完結後、藤村は感想集『桃の雫』（昭和十一年）を出す。その中の「小半日」という文章は、戸川秋骨に誘われて喜多六平太の例会に参加して小半日を送った時の感想である。藤村は喜多六平太の「蟬丸」を見て非常な感激を示す。

蟬丸は王子である。何故にあの盲目な王子が父の帝によりて捨てられねばならなかつたか、その作者の意図ははつきりとわたしたちの胸に來ない。わたしの想像によると、蟬丸は中世風な苦行者の首途かどでに置かれた王子であつて、父なる帝はその子に解脱への道を教へたものであらうと考へるが、これはわたしの想像であるに過ぎない。おそらく中世の昔の人達はその作者の意図を今日のわたしたちより遙かによく汲み取つたであらう。それにひきかへて、不幸な王子の姿はありありとわたしたちの眼に浮ぶ。作者の説き明さうとするものが時と共に失はれて来た後世になつても、その人の感じたものだけはこんなに長く残つてゐることが思はれる。

この日藤村が鑑賞した能「蟬丸」⁽¹⁰⁾は、父なる帝に捨てられた蟬丸王子の物語である。藤村の「蟬丸」への知識が乏しいためでもあらうが、この文には晩年に獲得した「捨子」意識に対する客観的な視角が窺われる。「不幸な王子の姿はありありとわたしたちの眼に浮ぶ」「その人の感じたものだけはこんなに長く残つてゐる」云々、という箇所には、「故人」の中で捨子に共感を示していた著作初期の激しい精神の動揺の痕跡はもはや見られず、あくまでも客観的に対象を捉えようとする姿勢が感ぜられる。まさにそれは人生の旅の末、「故人」正樹に出会えた「捨子」藤村

ま と め

『落梅集』の中で「吾胸の底のこゝには言ひがたき秘密住めり」と記しているように、藤村は生涯重苦しく執拗な不安を心に抱き続けた作家であった。本稿ではその秘密の正体を「捨子」意識という側面から探ってみた。まがましい性の欲望を前にして、藤村は父に捨てられるかも知れないという人知れぬ不安にとらわれる。この「捨子」意識というコンプレックスによって、彼は旅に身を委ねるようになったのである。「故人」に芽生えた「捨子」意識は、「うたゝね」の子殺しや『破戒』の父殺しの様相を経て、『春』以降の自伝的小説の中では、いよいよ主人公に捨吉という名を与え（『家』の中では一旦三吉と名を変える）、彼に「感情移入」することによって自己救済の道を求める。漂泊を終えて家の歴史を辿ることによって父に巡り会い、父の系譜を見出した藤村は、「選民」意識という自己暗示を掛け始める。『夜明け前』の完結によってとうとう「捨子」意識という呪縛を解いた藤村は、客観的な目をもって自分を見つめることができたのであろう。

注

(1) 亀井勝一郎著、『島崎藤村論』、新潮社、昭和四二年、一六〇—一八三頁参照。

(2) 関良一、「家——まぼろしの三部作——」（三好行雄編、『島崎藤村必携』所収、學燈社、昭和四二年）、一一一—一三七頁参照。

(3) この芭蕉の俳句は、明治二六年三月『文学界』第三号に発表された「かたつむり」にも「捨子に秋の風いかにと

桃青が口吟みしもこのほとりと覚えて今昔のおもひに堪へず、しばし江畔にたゞずみて天地の飛動するを見たり」云々、と引用されている。

(4) 西丸四方著、『島崎藤村の秘密』、有信堂、昭和四一年、一三一—一四九頁参照。

(5) 藤村は明治二六年、『ハムレット』の影響による戯曲『悲曲 琵琶法師』『朱門のうれひ』等の作品を発表している。シェイクスピアは、当時の『文学界』の同人らに大きな影響を与えたのであるが、『春』には、青木(透谷)が『ハムレット』の悲劇を持ち出し、「オフエリアの歌」の一部分を暗唱する場面が描かれている。

(6) 相賀徹夫編、『日本大百科全書一三』、小学館、昭和六三年、七六頁。

(7) 伊東一夫編、『島崎藤村事典』、明治書院、昭和五一年、六〇七頁。

(8) 「かたつむり」(明治二六年三月『文学界』第三号所収)

(9) 『桜の実』では原種夫の仮名が与えられ、『桜の実の熟する時』の初出『文章世界』の中では岡幸吉と改められたが、春陽堂刊の改稿では岸本捨吉の仮名が選ばれるようになった。

(10) 世阿弥作の能楽の曲名。延喜帝の第四皇子蟬丸の宮は幼少から盲目だったので、帝は清貞に命じて逢坂山に捨てさせる。蟬丸は頭を剃り、琵琶をだいて泣き沈む。一方、髪がさか立つ病気を持つ姉の逆髪は、狂乱の体でさまよい歩いて逢坂山に至り、蟬丸の琵琶の音にひかれて弟と再会する。二人は互いの身の不幸を嘆き、やがて名残りを惜しみながら別れるという内容。

[付記] 本文の引用は、筑摩書房版『藤村全集』(昭和四一—四六年)に拠り、旧字は原則的に新字に改めた。尚、引用文の傍点はすべて引用者による。

(大学院後期課程学生)